

「生ける水」

～ 信じる者が受ける御霊 ～

はじめに

【新改訳改訂3】

ヨハネの福音書

7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、**生ける水**の川が流れ出るようになる。」

7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである。

今回はイエシュアが述べられた「生ける水」とは何か、ということについてヘブル的視点から考えてみたいと思います。上記の御言葉は、イスラエルの三大例祭の一つ「仮庵の祭り」において語られ、その「祭りの終わりの大いなる日」、すなわち八日目に語られたものですが、その背景について B.F.P Japan のホームページから以下の文章を抜粋しました。

仮庵の祭りの最後、「水を汲む祝い」のときに…多くのファンファーレ、歌と喜びで、人々はシロアムの池へと祭司の後を付いていきました。そして、ギホンの泉から汲み上げられた水を、金色の水差しいっぱいに満たしました。それは生ける水を象徴しています。神殿へ戻るとき、祭司は水を祭壇に注ぎます。そして彼らは、「ああ、主よ。どうぞ救ってください。」または、「ホザナ」と言って叫びます(詩 118:25)。この素晴らしい出来事のクライマックスに、イエスは大声で言われました… (B.F.P Japan HP ティーチングレターより)

「水を汲む祝い」。このような儀式があったことは、聖書からではうかがい知ることができません。今日このような聖書に記されていない情報から、御言葉の理解を深めていく事も、インターネットの普及などによって、手軽に行えるようになりました。しかし聖書に記されていない情報によってではなく、聖書に記された情報に目を留め、それによって聖書を説く事もまた有益であると考え、今回はそのような姿勢でこの「生ける水」というテーマに取り組んでみたいと思います。

「生ける水」、これをヘブル語で「マイム(מַיִם)ハツイーム(חַיִּים)」と言います。直訳すると「命のある水、生きている水」となりますが、聖書では多くの場合、井戸、泉などから湧き出る「湧き水」と訳されています。ではこの「生ける水」が、実際に聖書の中でどのような場面で用いられ、何を指し示しているのかを見ていきたいと思ひます。

1. 祝福

【新改訳改訂3】

創世記

26:19 イサクのしもべたちが谷間を掘っているとき、そこに湧き水の出る井戸を見つけた。

この箇所は「湧き水、生ける水」マイム・ハッイームが聖書で最初に記された場面です。聖書において最初のもの、第一のものは「初子、長子」などに表されるように、最も基本となる重要な存在であると考えられます。ですからこの箇所は、「生ける水」の本来の意味を指し示す内容であると考えられます。そしてその内容はこうです。アブラハムの子イサクは飢饉に見舞われ、ペリシテ人の地、ゲラルに移住します。そこで神は「百倍の収穫を見た（創世記 26:12）」と言わしめるほどに、イサクを大いに祝福されます。しかしそれを妬んだペリシテ人たちは、イサクの父アブラハムが掘った井戸を塞ぐなどして彼に嫌がらせをし、「あなたは、われわれよりよりはるかに強くなったから、われわれのところから出て行ってくれ。（創世記 26:16）」と言って自分たちの地から追い出します。そこでイサクは彼らのもとを立ち去り、ゲラルの谷間に天幕を張り、そこに住みます。そこで「イサクのしもべたちが谷間を掘っているとき、そこに湧き水の出る井戸を見つけた。」という箇所に聖書で最初の「湧き水」マイム・ハッイームが記されています。そしてイサクはその井戸をエセク(עֶסֶק)と名付けます。これは「争う」という意味のアーサク(אֶסֶק)に由来した名前です。なぜならこの井戸をめぐるイサクはペリシテ人と争ったからです。ちなみにこのエセクもアーサクも聖書の中でこの箇所にしか記されていない貴重な言葉です。ペリシテ人たちは「この水はわれわれのものだ。」と言ってイサクからエセクの井戸を奪い取ります。仕方なくイサクはもう一つの井戸を掘りますが、ここでも同様の問題が起こります。彼はこの井戸をシテナ(שֵׁטָנָא)と呼びました。これは「敵意」という意味ですが、「敵対する、訴える」という意味の動詞サータン(שָׂטָן)の派生語です。ちなみに悪魔であるサタンもこの言葉に由来します。そしてイサクはまた別の井戸を掘ります。しかしこの井戸については争いがなかったので、「今や、【主】は私たちに広い所を与えて、私たちがこの地でふえるようにしてくださった。（創世記 26:22）」と言って、これを「広がる、増える」という意味の動詞ラーハヴ(לָרַחַב)の派生語でレホボテ(לְהוֹבֹתַי)「広々とした所」と名付けます。

この文脈から「生ける水、湧き水」が、どのような存在であるのかと考えるならば、「神の祝福」としての象徴と捉えることができます。その祝福とは、神がアブラハムとその子孫を祝福するという約束、契約のことであり、創世記 21:22「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる。」というものです。実は先ほどの創世記 26 章の場面で、イサクは二つの大きな過ちを犯しています。一つは約束の地カナンを去ってエジプトに行こうとしたことです。理由はカナンの地が飢饉に見舞われたことですが、神がアブラハムとその子孫とに与えると約束した地を離れることは、神に対する不信の現れです。実際には神の介入がありエジプトに行くことはありませんでしたが、それでも彼はペリシテ人の地、異邦人の地ゲラルに行ってしまう。そして二つ目の過ちはそのゲラルの地において、イサクは自分の妻であるリベカを「私の妹です。」と偽ってしまったことです。これはかつて父アブラハムが犯した同じ過ちです。その時と同じく大事には至りませんでした。イサクが神ではなく人を恐れたゆえの結果です。しかしそんなイサクを、なんと神は大いに祝福されます。ペリ

シテ人の執拗な嫌がらせにも遭いますが、彼が井戸を掘ればいつもそこから「生ける水、湧き水」があふれ出て来るのです。イサクが正しかったからではありません。彼は間違っていたのです。イサクは間違った道に進み、更に間違った事を口にしたのです。その理由は全て神に対する不信、神の約束に対する不信のゆえであると言えます。しかし神は彼を祝福されるのです。先ほど述べた「百倍の収穫を見た。(創世記 26:12)」という記述は、そのような背景で起こった出来事なのです。たとえるなら、ろくに仕事もしない人が宝くじに当たるようなものでしょうか。妬まれても当然です。実際にイサクはペリシテ人の妬みを買ひ、執拗な嫌がらせに遭います。このように、人の善行や能力によって与えられるものではなく、人の過ち、愚かさによって止められることも、またいかなる者との争いによっても失われることもない、神の約束ゆえの祝福、それがこの「生ける水、湧き水」マイム・ハッイームが示すものであると考えられます。

そしてこの神の祝福とは、アブラハム、イサク、イスラエルに約束された「こうして地のすべての国々は、あなたの子孫によって祝福される。(創世記 26:4)」というこの地を祝福する神のご計画の事であると考えられます。この神のご計画は、イスラエルの民の良し悪しに関わるものではないので、異邦人の妬みを買ひます。「神はなぜイスラエルを選ばれたのか。」「なぜユダヤ人でなければならないのか。」という反感、不満。これは神のご計画に対する反抗からくるものです。更にユダヤ人の愚行の歴史がそれに拍車をかけています。すなわち彼らは旧約聖書の中に記されているように、神に選ばれた民であるにも関わらず、その神を捨て、偶像礼拝に走り、神の怒りを買ひ、ついに国土を失ったという事、そして新約聖書に記されているように、神の御子イエシュアを迫害し、十字架にかけて殺したという事、そしてイエシュアを信じる者たち迫害したという事などです。歴史の中で度々起こってきたユダヤ人に対する迫害、虐殺はそれを指し示しています。イサクが掘った井戸、エセク、すなわちアーサク「争う」と名付けられた井戸はまさにその事実を指し示していると言えます。またその背後にはエセクの次に掘られた井戸「敵意」という意味のシテナについて述べたように、神の敵対者であるサタンの存在がある事も示されていると考えられます。しかし神はアブラハムと交わされた約束のゆえに、過ちを犯したイサクを大いに祝福されたように、その子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人に対して「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる。(創世記 21:22)」と言われる神であり続けられるのです。「生ける水」マイム・ハッイームとは、決して変わる事のない神の選び、約束、ご計画という、本来そのような意味を持った存在であると考えられます。そのように考えるならば、イエシュアの「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、**生ける水**の川が流れ出るようになる。(ヨハネ 7:38)」というメッセージが、祭りに集まっていたユダヤ人たちに向けて語られたものであるということの理由にもなり得ると考えられます。

2. きよめ

【新改訳改訂3】

レビ記

14:5 祭司は、土の器に入れた**湧き水**の上で、その小鳥のうちの一只をほふるよう命じる。

14:6 生きていた小鳥を、杉の木と緋色の撚り糸とヒソブといっしょに取り、**湧き水**の上でほふった

小鳥の血の中に、その生きていた小鳥といっしょにそれらを浸す。

14:50 その小鳥のうちの一羽を土の器の中の湧き水の上でほふる。

15:13 漏出を病む者がその漏出からきよくなる時は、自分のきよめのために七日を数え、自分の衣服を洗い、自分のからだに湧き水を浴びる。彼はきよい。

民数記

19:17 この汚れた者のためには、罪のきよめのために焼いた灰を取り、器に入れて、それに湧き水を加える。

上記の御言葉はいずれも「汚れ」に関するもので、その内容はツアラアトによる汚れ、隠しどころの漏出による汚れ、死体に触れることによる汚れなど様々ですが、これらの「汚れ」のきよめのために「湧き水」すなわち「生ける水」が用いられています。その用い方も土の器に入れたり、直接身体に浴びたり、灰と混ぜ合わせたりと様々ですが、汚れをきよめる目的という点においては共通しています。このように「湧き水、生ける水」は「汚れ」をきよめること指し示すものであるとも言えます。また聖書において「汚れ」は「罪」とも言い換えられます。ですから「生ける水」は罪をきよめる、すなわち罪を贖う、罪が赦されることを指し示すとも考えられます。イエシュアは「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。(ヨハネ 7:38)」と言われました。イエシュアを信じるなら「心の奥底から」つまりその人の根本、原点から罪がきよめられ、「湧き水」のように持続的にきよめられ続ける、永続的、永久にきよくあり続けられる、そのような意味もまたこの御言葉には込められていると考えられます。

3. エデンの園

【新改訳改訂3】

雅歌

4:12 私の妹、花嫁は、閉じられた庭、閉じられた源、封じられた泉。

4:13 あなたの産み出すものは、最上の実をみのらすぎくろの園、ヘンナ樹にナルド、

4:14 ナルド、サフラン、菖蒲、肉桂に、乳香の取れるすべての木、没薬、アロエに、香料の最上のものすべて、

4:15 庭の泉、湧き水の井戸、レバノンからの流れ。

雅歌は花婿と花嫁が交わし合う愛の歌の書です。これを私たちはメシアであるイエシュアと教会になぞらえたものと捉えたりもしています。そこにも一箇所だけ「湧き水、生ける水」が使われています。それは花婿が花嫁のすばらしさを様々な美しいもの、高価なものにたとえて表現している部分です。そこで花婿は花嫁を「閉じられた庭」と呼ぶところから歌い始めています。聖書の中で「閉じられた庭」と言えばやはりエデンの園が思い出されます。エデンの園は最良のもの、最上のもので造られた場所であり、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常に良かった(創世記 1:31)」と言われた神の庭です。しかしその場所がサタンの誘惑と、アダムとエバの罪によって閉じられる結果となり、エデンの園はまさに「閉じられた庭」となったのです。エデンの園は多くの果樹や草花、動物たちの宝庫でしたが、同時に水の源でもありました。

【新改訳改訂3】

創世記

2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。

エデンにはまさに「庭の泉、湧き水の井戸、レバノンからの流れ」のある、「生ける水」の園であったと言えます。レバノン(רִבְנוֹן)とは「白い」という意味のヘブル語ラーヴァーン(לָוֶן)が由来で、石灰石で覆われ、日の光で白く輝く美しい山々があったことから呼ばれた名ですが、聖書において「白」はきよさ、罪の赦しの象徴です。

【新改訳改訂3】

イザヤ書

1:18 「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

緋色を白くする、罪をきよめる流れ、「生ける水」が川となって流れ出る場所、「閉じられた庭」それがエデンの園を指し示していると考えれば、雅歌に描かれている花婿は、それを心から恋慕う花嫁に重ね合わせるほどに求めていると言えます。つまり「閉じられた庭」であるエデンの園が、再び開かれ、そこに住まうことを切望しているということだと考えられます。このように、雅歌に記された「湧き水、生ける水」は、花婿なるイエシュアが、エデンの園をご自分の花嫁のように恋慕っておられるということ、或いは開かれたエデンの園において、花嫁となる者たちとともに住むことを切望しておられることが指し示されていると考えられます。

4. イエシュアの十字架

【新改訳改訂3】

エレミヤ書

2:13 わたしの民は二つの悪を行った。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。

17:13 イスラエルの望みである【主】よ。あなたを捨てる者は、みな恥を見ます。「わたしから離れ去る者は、地にその名がしるされる。いのちの水の泉、【主】を捨てたからだ。」

エレミヤ書においての「湧き水、生ける水」マイム・ハッイームは、「主」ご自身をたとえていることがはっきりと記されています。しかしその「主」とは、力ある「主」でもなく、恵み深い「主」でもなく、イスラエルの民に「捨てられる主」であることが解ります。イスラエルが行ったこの悪は、旧約の歴史を見れば明らかです。彼らはエジプトの奴隷の状態から解放して下さったアブラハム、イサク、ヤコブの神である主に聞き従わず、水をためることのできない、多くのこわれた水ため、すなわち偽りの神々、偶像礼拝に走ったのです。更に彼らは神である主が遣わした預言者たちを殺し、そして神の御子であるメシア、イエシュアを十字架につけて殺したのです。このように「湧き

水、生ける水」とは、イスラエルの民が行った「悪」、犯した罪を指し示すものであり、そしてその罪のために「捨てられる泉」となられた神の御子、十字架にかかれて死なれたキリスト、メシアであるイエシュアを指し示すものであるとも考えられます。

5. エルサレム

【新改訳改訂3】

ゼカリヤ書

14:8 その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ、夏にも冬にも、それは流れる。

ゼカリヤ書 14 章は、「見よ。主の日が来る。(14:1)」、「主が出て来られる。(14:3)」、「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。(14:4)」、「私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る(14:5)」と記された、イエシュアの地上再臨を指し示す預言です。そしてイエシュアが聖徒たちとともに戻って来られる街の名はエルサレムです。イエシュアがエルサレムに戻って来られる「その日」、この街から「湧き水、生ける水」マイム・ハッイームが流れ出ると預言されています。そして「主は地のすべての王となられる。(14:9)」、「そこには人々が住み、もはや絶滅されることはない。エルサレムは安らかに住む。(14:11)」と記され、エルサレムにおいてイエシュアが全世界の王となるメシア王国、千年王国が樹立することが示されていると考えられます。このように、ゼカリヤ書における「生ける水」は、イエシュアの再臨、メシア王国の建国という、神のご計画のクライマックスとも言うべき出来事を指し示していると言えます。そしてその舞台の中心はイスラエルの首都、エルサレムです。イエシュアが再臨され、エルサレムの街から流れ出る「湧き水、生ける水」は東の海と西の海に分かれて流れることが記されていますが、これは具体的には死海と地中海を指していると考えられます。なお東の死海に流れて行く川については、エゼキエル書が 47 章で詳細に記しています。

そしてゼカリヤ書 14 章は、エルサレムにイエシュアが再臨され、「生ける水」が流れ出し、メシア王国が建て上げられることによって一つの事が起こることを預言しています。それは「地上の諸氏族(14:17)が「毎年、万軍の主である王を礼拝し、『仮庵の祭り』を祝うために上って来る。(14:16)」という事です。つまり「千年王国、メシア王国」樹立後もこの祭りは行われ、その時には、ユダヤ人だけが集まる祭りではなく、世界中の、地上の全ての人々が集まる最も壮大な祭りとなるということです。そしてこの「仮庵の祭り」にエルサレムに上って来ない者には「雨は彼らの上に降らず…主が打つその災害が彼らに下る。(14:8)」とまで記されています。イエシュアはヨハネの福音書において「祭りの終わりの大いなる日」に「生ける水」について述べられました。この祭りとは「仮庵の祭り」の事です。イエシュアはおそらくゼカリヤ書 14 章に記された、メシアの再臨、メシア王国の樹立の預言を想起させるために、この祭りの時期に語られたと考えられます。しかも「祭りの終わり」すなわち八日間に及ぶ「仮庵の祭り」祭りの最終日に語られました。それは神のご計画の終わり、完成、完了を指し示すためでもあったと思われる。

6. 御霊

【新改訳改訂3】

ヨハネの福音書

7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、**生ける水**の川が流れ出るようになる。」

7:39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

ヨハネはこの「生ける水」のことを「イエスを信じる者が後になってから受ける『御霊』のこと」であるとはっきり述べています。そしてヨハネはこの「御霊」について、イエシュアの言葉からこのように記しています。

【新改訳改訂3】

ヨハネの福音書

16:13 しかし、その方、すなわち真理の**御霊**が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。**御霊**は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

「やがて起ころうとしていること」、すなわち神が何をなさそうとしておられるのかという、神のご計画を示す存在、それが「御霊」であるとヨハネは述べています。今回取り上げた「生ける水」についての五つの項目は全て神のご計画において重要な要素と言えるものでした。

1. **祝福**…まず初めに、神はアブラハムとその子孫によって地上の全ての民族を「祝福」するというご計画を立てられました。
2. **きよめ**…人はみな汚れ、罪を持っており、「きよめ」すなわち罪の赦しが必要です。神に聞き従う者を神は「きよめ」て下さいます
3. **エデンの園**…かつてアダムとエバがそうであったように、花婿なるイエシュアは、エデンの園において花嫁となる者を恋い慕い、ともに住み、ともに生きることを切望しておられます。
4. **イエシュアの十字架**…十字架は、罪を贖うという目的だけでなく、死に至るまで忠実な者となるための、イエシュアに与えられた神からの試練でした。そしてこれによってイエシュアの御名を高く上げ、すべてのものをこの御名のもとにひざまづかせるためでした。

【新改訳改訂3】

ピリピ人への手紙

2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかかめ、

2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

5. エルサレム…神はその御心によってアブラハムとその子孫をお選びになりました。そしてそれと同様に、このエルサレムという街をもお選びになりました。イエシュアがこの街に再臨される時、ついに神のご計画は完了、完成を迎えるのです。ですからエルサレムなくして神のご計画は成し得ません。

このように、「生ける水」とは、神のご計画、「やがて起ころうとしていること」を私たちに示すという「御霊」の働きを表していると言う事ができ、「御霊」を受けるとは、神のご計画を知る、受け入れることであると考えられます。ちなみにイエシュアは生ける水の「川」が流れると言われましたが、この「川」と訳されているヘブル語はナハル(נַחַל)と言い、これと全く同じ綴りでナーハル(נָהַר)という動詞があり、その意味はなんと「所有する、相続する」という意味なのです。つまり「生ける水の川」とは、神のご計画である「神の国」を「所有する、相続する」という意味が隠されているということが考えられます。

最後に

今回はイエシュアが語られた「生ける水」が、神のご計画を指し示していることを述べましたが、何も神のご計画を指し示すものはこの限りではありません。福音書に記されたイエシュアの言動の全て、そして聖書に記されたありとあらゆる出来事、御言葉からこのような神の国のご計画を導き出すことができるのではないかと考えられます。イエシュアは、神の国は「畑に隠された宝」のようだと言われました。つまり「宝」とは、全て神の国のご計画に関するものだということです。「畑に隠された宝」も、そしてこの「生ける水、湧き水」も、土を「掘る」ことで探し当てることができます。ヘブル語で「掘る」という意味の動詞ハーファル(חָפַר)は、「探り出す、探究する」という意味もあるのです。隠された宝である神の国のご計画を探究する事、これは全財産をかけるほどの価値のあるものだと言われました。これからも一緒に、さらに神の国を探究してまいりましょう。

【新改訳改訂3】

マタイの福音書

13:44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。